自然環境を活かした木谷の産業の歴史

近畿大学工学部建築学科　門脇陽（4 年）・成澤幹太（4 年）・和田周晟（4 年）・樋渡彩（講師）

木谷は古くから廻船業の拠点だった。江戸時代には、地域の船主たちが瀬戸内海から日本海にかけて交易を行い、藩米の輸送や廻船による物資の流通を担った[注1]。また、江戸時代から明治時代にかけて、木谷では入浜式の塩田が営まれていた。現存する二馬手塩田跡樋の輪は、その名残をとどめる重要な史跡である。元禄期（1688 ～ 1704 年）には塩田が開発され、1930 年の廃止まで続いたとされる[注2]。木谷の赤土は煉瓦の原料として使われ、明治期には木谷および周辺地域で煉瓦製造が盛んだった[注3]。こうして作られた煉瓦は、酒造用の煙突などに用いられ、地域の近代的建築に貢献した。さらに、現在では、馬鈴薯や柑橘、野菜・花のハウス栽培などの農業が盛んである。また沿岸部では漁業や牡蠣養殖も行われている。このように木谷は自然環境を活かしながら産業の移り変わりとともに地域の役割が変化した。

注
1）東広島地歴ウォーク 馬鈴薯畑と海岸を歩こう―安芸津町木谷、https://www.higashihiroshima-digital.com/special-240729/（2025 年 12 月 21 日閲覧）
2）市史跡 二馬手塩田跡 樋の輪 - 東広島市、https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/soshiki/kyoikuiinkaishogaigakushu/3/11/bunkazai/town/akitsu/37185.html?utm_source=chatgpt.com（2025 年 12 月 21 日閲覧）
3）東広島デジタル、https://www.higashihiroshima-digital.com/special-240729/?utm_source=chatgpt.com（2025 年 12 月 21 日閲覧）



木谷のじゃがいも畑と瀬戸内海
撮影：和田直也

赤崎地区の農業

安芸津町木谷・赤崎地区のジャガイモ畑には、農家一人ひとりのこだわりが息づいている。畑に入るとまず目に入るのは、均一に整えられた畝の列である。畝の高さや形、列の間隔は長年の経験によって導き出されたもので、ジャガイモが健全に育つための重要な条件となっている。畝づくりは植え付けの段階から始まり、発芽後も生育に合わせて土を寄せながら形が整えられていく。わずかなずれや不揃いは、後の作業や収穫に影響するため、植え付け時のライン取りにも細心の注意が払われる。農家の間では、畝の形そのものが技術の証とされ、富士山型やかまぼこ型など、それぞれに理想とする形がある。また、この地域では畑の景観そのものにも高い意識が向けられている。整然とした畝は、作業効率だけでなく、農業への誇りを示すものでもある。長年ジャガイモを作り続けてきた中で培われた技術と感覚は、世代を超えて受け継がれ、新たにこの地に入る農家にも共有されている。畑は単なる生産の場ではなく、地域の知恵と美意識が表れる場となっていて、畑がまるで芸術品のような感情を見る人に抱かせてくれる。



じゃがいも畑の畝
撮影：和田直也



じゃがいもの葉っぱ
撮影：樋上 颯人



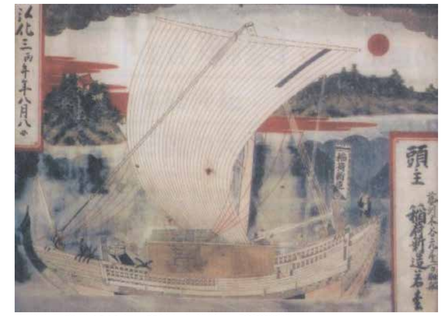
道の駅で売られていた馬鈴しょ
撮影：樋渡彩

地の利を活かした廻船業

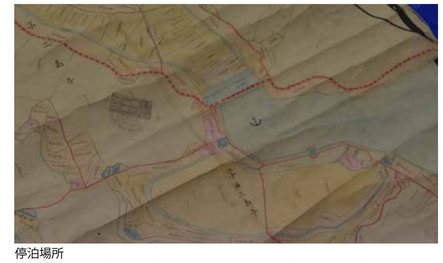
廻船業元屋は大型船を利用して幕府・藩の年貢米の輸送や商人等の民間物資の輸送に携わった。米の運送以外にも様々な物資を運んでいた。木谷村などは元屋に代表されるように、大型船（弁財船）を数隻持ち、米、塩はもとより他藩の御用まで勤めていたとされる。賃積船（運賃船）という、積み荷の売買には関与せず、荷物を荷受け問屋に引き渡し、運賃を受け取っていたとされている。特定の航路で荷物を売り買いしながら、航海するいわゆる商船である買積船よりは利潤は少ないとされるが、季節変動が少なく遭難しない限りは安定感を持つメリットがあった。

安芸津地域における海運業の展開を理解するうえで、光保家（屋号「元屋」）の活動は重要である。光保家は江戸中期から明治期にかけて廻船業を営み、地域経済および港湾機能の発展に大きく寄与したとされる。

光保大兵衛は、廻船３艘を所有し、1793 年には「稲荷丸」を造船している。1827 年には永代廻船方頭取の命を受け、地域海運の中核的存在となった。1806 年の『寛政浦海難国録』には、「稲荷丸」が遠州灘沖で遭難し、漂着・救助を経て唯一の生存者である平原善松が帰国するまでの経緯が記されており、当時の廻船業が常に海難の危険と隣り合わせであったことを示している。



木谷光保家が 1846 年に奉納した船絵馬「稲荷新造」
『木谷の歴史』2023 年、p.16。



停泊場所
安芸津歴史民俗資料館所蔵、明治 16 年 8 月「広島県安芸国豊田郡木谷村地籍全図」の部分
二馬手塩田の正面に船溜まりがあったことが地籍図からわかる。小さな湾になっており、風の影響を受けにくく、安定した水面だったと思われる。現在は堤防が築かれ、船は入れないようになっている。



島根県浜田市外ノ浦清水家に残る「諸国御客船帳」
『木谷の歴史』2023 年、p.17。
木谷の船が日本海側の島根まで行っていたことがわかる。



かつての船溜まりと二馬手塩田跡
撮影：樋渡彩
堤防が出来たことにより、現在は船が入らない状態になっている。

牡蠣養殖業

安芸津では、牡蠣の養殖を 1950 年代後半から初め、1960 年代には、1964（昭和 39）年には 250 トンを生産した。

木谷では、かつて海水浴場として利用されていた赤崎海岸に牡蠣の「抑制棚」が設置されている。これは、カキを一時的に干出（空気にさらすこと）させて抵抗力を高め、丈夫な種ガキを育てるための重要な場所である。



赤崎海岸の牡蠣養殖
撮影：成澤幹太



赤崎海岸の牡蠣養殖
撮影：成澤幹太

江戸時代に開拓された二馬手塩田とその跡地

安芸津湾岸最古の塩田

安芸津町木谷に位置する「二馬手塩田」は、この地域の産業史を語る上で欠かせない重要な遺構である。その起源は江戸時代前期、1690年にまで遡る。当時、広島藩内では竹原塩田が先進的な成功を収めており、その「入浜式塩田」の技術と繁栄の影響を受け、安芸津湾岸で最初に築調されたのがこの二馬手塩田であった。以来、1932年（昭和7）年に廃止されるまで、約240年もの長きにわたり、地域経済の基盤として、また生活の糧として塩づくりが続けられてきた[注1]。

調査概要と遺構の確認

2025年10月、私たちは二馬手塩田跡地の現状を把握するため、現地調査を実施した。この地域に広がる低地には、かつての塩田区画を思わせる湿地が広がっている。 特筆すべきは、塩田時代に海水を制御していた「樋門（丸樋）」や「導水路」の痕跡と思われる遺構が、現在も水路や地形として確認できた点である。また、かつて塩田の守り神として信仰された「塩釜神社」の鳥居が跡地の入口に残されており、地域の人々が塩田の歴史を精神的な拠り所として大切にしてきたことが現地で強く感じられた。

製塩について：入浜式塩田の仕組み

二馬手塩田で採用されていた「入浜式製塩」は、自然の潮の干満を利用した巧妙なシステムであった。満潮時に堤防の樋門（ひもん）をいて海水を引き込み、それを塩田の床（浜）に浸透させる。水分が蒸発して塩分が付着した砂を「沼井（ぬい）」と呼ばれる装置に集め、さらに海水をかけて濃い塩水（鹹水・かんすい）を採るという手法である。 二馬手塩田には約7反（約7,000㎡）の広大な敷地に、119枚もの沼井が設置されていた記録が残る[注2]。炎天下、直射日光で40度近くになる地表で砂を撒き、集める作業は過酷を極める重労働であり、「浜子」と呼ばれた労働者たちの汗の結晶が、この地の塩であったと言える。

転換期：塩から農地へ

明治から大正にかけて稼働を続けた二馬手塩田だが、近代化の波や塩業整備の影響を受け、1932（昭和7）年にその歴史に幕を下ろした。廃止後の跡地は埋め立てられ、大部分が農地へと姿を変えた。特に、安芸津の気候風土に適した馬鈴薯（ジャガイモ）畑としての利用が進み、かつて塩を生み出した土地は、現在では良質な農作物を育む大地として地域を支え続けている。

地理的背景：古代の良港「赤崎泊」

二馬手塩田が築かれた場所は、単なる海辺の湿地ではなかった。塩田開発以前、この地は「赤崎（あかさき）」と呼ばれ、平安時代後期には既に瀬戸内航路の要衝として機能していたことがわかっている。現在陸地になっている範囲も明治時代は海であった[注3]。このことから、二馬手は古くから風待ち・潮待ちに適した天然の良港であったことがうかがえる。

景観の変容：堤防建設と環境変化

現地調査で特に印象的だったのは、海岸線に築かれた堤防の存在である。現在の二馬手地区は頑丈な堤防によって海と隔てられている。

聞き取り調査および資料によれば、この堤防はもともと存在したものではなく、昭和40年頃（約60年前）に建設されたものであるという[注4]。この堤防建設により、かつて船が行き交った「二馬手港」としての機能は完全に失われ、海水の流入も止まった。 塩田時代には海水を引き込むために開かれていた海への入り口が閉ざされたことで、現在の「農地としての二馬手」の景観が固定化されたことが、現地を歩くことで実感を伴って理解できた。



1825年
国立公文書館「芸藩通志」、豊田郡木谷村部分



1898年
国土地理院、大日本帝国陸地測量部、2万分の1の地形図



1947年
国土地理院、空中写真



1976年
国土地理院、空中写真



2010年
国土地理院、空中写真



木谷にける塩田の位置、1898年
国土地理院、大日本帝国陸地測量部、2万分の1の地形図に成澤が着色



木谷小学校史　廃止直前の二馬手塩田（1930）
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 7



二馬手塩田跡地
撮影：成澤幹太（2025年10月6日）



二馬手塩田跡地の樋門
撮影：成澤幹太（2025年10月6日）



二馬手塩田跡地の鳥居
撮影：成澤幹太



二馬手塩田跡地の鳥居
撮影：成澤幹太



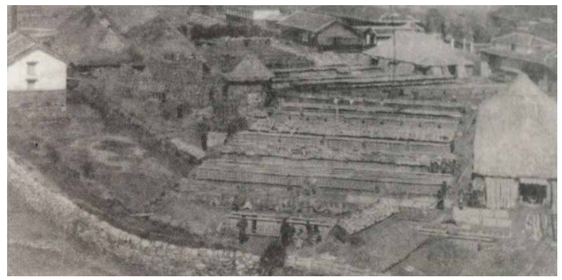
二馬手塩田周辺の等高線
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 7

木谷の地質を活かした窯業

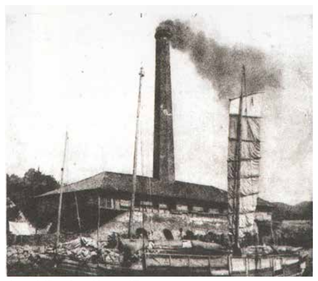
1879年に安芸津の煉瓦は三津の西山に煉瓦工場を造り、製造に着手したことが始まりとなっている。明治期に創業した安芸津の煉瓦工場はほとんどが木谷村か三津町であり、木谷の赤崎や三津の立花、中ノ村、榊山が良質の原土に恵まれていたことによる。特に赤崎では鉄分が多く、畑を掘り登り窯を使って、簡単に焼けたそうだ。海に近いことで船運にも恵まれm煉瓦工場林立の原因になったとされる。

1906年に和田煉瓦製造工場がホフマン式窯を設置後は各煉瓦工場が急速に近代化が進み零細な業者は淘汰された。

大正時代に入って、近代化した窯が次々と築かれ、日中戦争後の増大する需要にも応じたが、煤煙公害（石炭焚）やセメントブロックに押され、戦後の復興需要が終わった1965年になると工場閉鎖に追い込まれた。



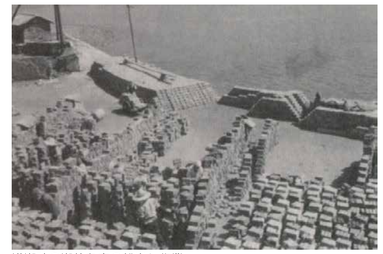
1905（明治38）年頃の赤崎煉瓦工場
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 26



大正時代の和田煉瓦工場
明治39年5月に広島県内で最初に導入されたホフマン式輪環窯。
『木谷小学校創立150周年記念誌』2026年、p. 255



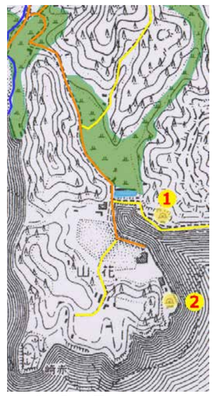
天日乾燥
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 26



満潮時の潮待ち中の船出し作業
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 26



碇泊した機帆船に積み込む準備
手前には商品にならない煉瓦が山積みにされている。
『木谷の歴史（改訂・増補版）』2023年、p. 26



レンガ工場の位置、1898年
国土地理院地図に追記
作製：章単婕



①の位置　1961～1969年
国土地理院、空中写真



①の位置 1974～1978年
国土地理院、空中写真



①の位置　1979～1983年
国土地理院、空中写真



①の位置　1987～1990年
国土地理院、空中写真



①の位置　現在　　撮影：門脇陽
煉瓦工場の痕跡はなかった。



②の位置　1961～1969年
国土地理院、空中写真



②の位置 1974～1978年
国土地理院、空中写真



②の位置　1979～1983年
国土地理院、空中写真



②の位置　1987～1990年
国土地理院、空中写真



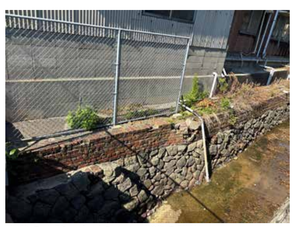
②の位置　現在　　撮影：門脇陽
煉瓦は落ちておらず、煉瓦工場の痕跡はなかった。



木谷の鉄工所にあるレンガ造の煙突　　撮影：成澤幹太



木谷の元町役場の塀
撮影：和田周晟



木谷の水路におけるレンガ造の護岸
撮影：門脇陽

注

1）木谷小学校創立150周年記念事業実行委員会編『木谷小学校創立150周年記念誌』2026年。
2）東広島市市史跡 二馬手塩田跡 樋の輪。
3）木谷小学校創立150周年記念事業実行委員会編、前掲書。
4）同前。

謝辞　本研究は、公益財団法人クリタ水・環境科学振興財団（代表：樋渡彩『瀬戸内における産業空間に関する歴史的考察』）の研究助成と、東広島市と近畿大学の共同研究である Town & Gown Office のＣＯＭＭＯＮプロジェクト（代表：樋渡彩）による成果の一部である。この場を借りて感謝申し上げる。